

Ⅲ 今月のトピックス

【米国農務省 米国作付面積報告 (Acreage (6月30日公表)) の概要】

<報告内容のポイント>

- 2008年の米国の作付面積は、小麦が5%増加、とうもろこしが7%減少、大豆が17%増加する見込み。
- GM農作物の作付比率は、とうもろこしが7%増加、大豆は1%増加

1 2008年の穀物の作付面積及び収穫面積の状況

穀物全体の作付面積及び収穫面積は、小麦で増加しているものの、とうもろこしの減少が大きく、作付面積は前年に比べ2.3%減少し68.7百万ha、収穫面積は1.5%減少し60.8百万haとなる見込みである。

なお、米国中西部の豪雨・洪水の追加調査結果により、とうもろこしの予想収穫面積率が6月上旬の当初調査結果の92.4%から90.4%に下方修正された。

注：予測収穫面積率とは、作付けされた面積に占める収穫される面積の割合である。

(1) 小麦

小麦の作付面積は、前年に比べ5.0%増加し25.7百万haとなり、収穫面積は、前年に比べ10.9%増加し22.9百万haとなる見込みである。

種類別には、作付面積の最も大きい冬小麦が収穫面積で12.0%増加、春小麦が6.2%増加、デュラム小麦が22.3%増加とすべてで増加している。

(2) とうもろこし

とうもろこしの作付面積は、輪作体系や生産コスト高を背景として前年に比べ6.7%減少し35.3百万haとなり、収穫面積は、前年に比べ8.8%減少し31.9百万haとなる見込みである。

ただし、エタノール需要の高まりが継続することから、作付面積は1946年以降でみると昨年の37.9百万haに次いで2番目に大きく、引き続き高水準となっている。

2 2008年の油糧種子の作付面積及び収穫面積の状況

油糧種子全体の作付面積及び収穫面積は、その大半を占める大豆の増加から、作付面積は前年に比べ16.1%増加し32.3百万ha、収穫面積は13.9%増加し31.2百万haとなる見込みである。

なお、米国中西部の豪雨・洪水の追加調査結果により、大豆の予想収穫面積率が過去の平均の98.7%から96.8%に下方修正された。

注：予測収穫面積率とは、作付けされた面積に占める収穫される面積の割合である。

(1) 大豆

大豆の2008年の作付面積は、高い大豆価格を背景として、とうもろこしからの作付転換などから前年に比べ17.1%増加し30.2百万haとなり、収穫面積は、前年に比べ14.8%増加し29.2百万haとなる見込みである。

なお、作付面積は過去最高である2006年の30.6百万haを1%下回るものの高水準となっている。

表－1 米国の穀物の作付面積及び収穫面積

	2007		2008		対前年増減率	
	作付面積	収穫面積	作付面積	収穫面積	作付面積	収穫面積
穀物計	70,281	61,677	68,690	60,767	▲ 2.3	▲ 1.5
小麦	24,456	20,643	25,680	22,900	5.0	10.9
冬小麦	18,206	14,549	18,860	16,289	3.6	12.0
デュラム小麦	870	855	1,074	1,045	23.5	22.3
その他春小麦	5,381	5,239	5,745	5,565	6.8	6.2
大麦	1,627	1,420	1,671	1,473	2.7	3.8
とうもろこし	37,879	35,022	35,340	31,946	▲ 6.7	▲ 8.8
ソルガム	3,123	2,754	2,942	2,592	▲ 5.8	▲ 5.9
米	1,117	1,112	1,172	1,165	4.9	4.8
長粒種	835	830	911	905	9.1	9.0
中粒種	256	255	234	233	▲ 8.4	▲ 8.6
短粒種	27	27	27	27	0.0	0.0
その他の穀物	2,078	726	1,885	692	▲ 9.3	▲ 4.7

資料：米国農務省「Acreage」

注：穀物計及びその他の穀物には、ミレットを含んでいない。

表－2 米国の油糧種子の作付面積及び収穫面積

	2007		2008		対前年増減率	
	作付面積	収穫面積	作付面積	収穫面積	作付面積	収穫面積
油糧種子計	27,803	27,422	32,279	31,229	16.1	13.9
大豆	25,751	25,422	30,162	29,186	17.1	14.8
なたね	479	471	408	396	▲ 14.8	▲ 15.8
その他の油糧種子	1,573	1,529	1,709	1,646	8.6	7.7

資料：米国農務省「Acreage」

注：油糧種子計及びその他の油糧種子にはコットンを含んでいない。

3 遺伝子組み換え（バイオテクノロジー）品種の導入

2008年のとうもろこし及び大豆の遺伝子組み換え品種の作付割合は、とうもろこしが全作付面積に対して80%であり前年の73%から7ポイント増加した。

その品種別内訳は、害虫耐性品種が17%、除草剤耐性品種が23%、両者の特性をもつ害虫・除草剤耐性（スタック）品種が40%とスタック品種が拡大している。

また、大豆の遺伝子組み換え品種の作付割合は、全作付面積に対して92%であり前年の91%から1ポイント増加した。なお、大豆はすべて除草剤耐性品種である。

◇ なぜ、農家は遺伝子組み換え作物を栽培するのか？

米国で9割以上が遺伝子組み換えとなっている大豆を例にしてみると、大豆は豆科の為、除草剤が効き過ぎてしまう傾向があり、雑草の駆除には色々な種類の農薬を組み合わせ、噴霧の時期を工夫したり、人手による除草が必要な場合もあった。

しかし、遺伝子組み換え技術によりモンサント社が開発した除草剤耐性をもつラウンドアップレディ大豆を導入することによって、大豆農家は簡単に完璧に雑草を駆除でき、除草剤の散布回数を半分から3分の1程度までに削減できコストも安いなどのメリットがあるため、遺伝子組み換え品種の導入が急速に広まった。

(海外食料需給レポート2007のコラムより)

【米国作付面積調査報告の利用上の注意】

- ① 本報告は、米国農務省が6月上旬に穀物等の作付面積等に係る標本調査（作付品目の実測調査及び生産者の聞き取り調査）を実施し、その結果を基に作付面積等を見積もったものである。（調査時点の作付状況 とうもろこし：97%、大豆：79%）
ただし、本年は6月の中西部における豪雨・洪水の影響を把握するため、6月23～25日に追加調査を実施し、その結果を反映している。
- ② 本報告の内容は、米国の穀物等の州別作付面積、収穫面積予測を主体とし、さらにとうもろこし、大豆、綿花について遺伝子組み換え品種の作付割合を掲載している。
- ③ 本報告の結果は、7月中旬に公表された穀物等需給に関する各種レポートの作付面積等に反映されている。なお、6月までの作付面積等は、3月時点の作付意向調査結果に基づく作付意向面積等である。

表-3 とうもろこし及び大豆の遺伝子組み換え品種の作付割合

単位：%

	とうもろこし		大豆	
	2007	2008	2007	2008
害虫耐性品種	21	17	-	-
除草剤耐性品種	24	23	91	92
スタック品種	28	40	-	-
合計	73	80	91	92

資料：米国農務省「Acreage」

注：スタック品種とは害虫耐性と除草剤耐性の両方の特性をもつ品種である。